

---

# 食人鬼の魔法生活

放浪の焼きそば売り

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

食人鬼の魔法生活

### 【Nコード】

N9595X

### 【作者名】

放浪の焼きそば売り

### 【あらすじ】

主人公が食人鬼になって全力でギャグ(?)をする、そんなお話し読み専の厨房が書く小説なのでくおりていは低いです  
妄想が続くかぎりこの小説は早くて一日、遅くて一週間のスピードで更新いたします。

ユーザー以外の人からも感想を受け付けるように設定いたしました。

## プロローグ(前書き)

小説初心者です、よろしくお願い致します

## プロローグ

「お前死んだから」

「は？」

突然なに言ってくれやがりますかこの屋台に居そうな兄ちゃんはつて、チエーンソー持ってるし。危なっ

「お前は死んだ。これは紛れもない事実だ」

「嘘だと言つてバーニイ」

「キメエ」

ノリ悪いなーこの兄ちゃん。友人できんぞ、彼女できんぞ？

「友人ならゼウスとハデス、アスモデウスがいるが。後妻子いるぞ」  
なん……………だと……………！？

その若さで妻子持ちだと……………！？

「いや、俺75億歳」

ウソダー

「神っばいなにかだからな、私は不老不死なんだ。実際はユグドラシルの管理人だが」

か、神……………だと……………チエーンソー持ってる癖に……………

「ああ、神っばいなんかだ。それより自分の状態を確認しないのか？」

状態の確認……………？ぬおっ！？スケてる！？いやんえっch「キメエ」

(? ? ?)

「自分が死んで霊体、つまり魂だけの存在にやっと気づいたか。で、唐突だがお前には転生とやらをしてもらう」

えー……………めんど「強制参加だ」チツ…

「あーつとテンプラ？「テンプレ」そうテンプレ、そのテンプレ乙とやらの特典がつく、感謝はしなくてもどうでもいい」

特典ねえ……………転生自体興味ないし死んだら死んだで“ハイ、終わり”だし。なーにも願いが……………あ

「俺の元いた世界の家族に幸せをやってくれ」

「まだ叶えられる数を言っていないのだが……まあいい、それは入れないでおこう。ああ、それと叶えられる数は5つだ」

「びつみよーな数だなー、んー……よし、1つめ決まり」

「ありとあらゆるモノを喰らう能力をくれ」

「トリコに行ったら途中で自分が狙われそうな能力を選んだな。鳥を食えば鳥に変化できるようになり、犬を食えば犬に変化。ふむ、魔力喰らいも入れておくか。あと気喰らいも」

「その魔力喰らいと気喰らいってどんな能力なんだ？」

「ズバツと言うと喰った相手の魔力、気を自分のものにできる能力だ。喰ったやつにのつとられはしないぞ。たとえアンリ？マユ喰ったとしても」

「すげえ……チートじゃねえか……」

「さて、あと4つ残ってるぞ？」

「うん、2つ目と3つ目、4つ目はこれだな」

「家事、俊敏、殺気&amp;配遮断、それぞれA++ください」

「それ、別に一つでいいんだが「もつとチートになれと？」ふむ、ならばいいか。で、最後の願いは何だ？」

「ふっふっふ最後の願いは〜！」

「銀髪褐色美女にしてください」

「は？……そうか男のお前が女にか……くく……くくはははははははは……」

「oh……なんか危なっかCねえ……」

「ふふふ……すまない、少々無様なものを見せたな。ではお前の願い、叶えよう」

「おおーなんか力が湧いてきたー……ん？ちよいまて

「俺の死因と行く世界は？」

「死因か？それはお前がトイレに入ったその時にお前の友人の山田君がジャンプ見ながら「アツカリーン」と呟き不幸にもお前の頭に電球が突き刺さり苦しみながら脳が焼け死んだ。これが死因だ」

山田アアアア！何故ジャンプでアツカリーンって言ったアアアア！  
ジャンプ関係ねえじゃねえか！

「それと行く世界だがヒントだけだしてやるう、「百年戦争」「造物主」「自称正義の魔法使い」これだけ言えばわかるだろう？」  
うわっほいネギまでいすか

「ああ、聞いたらさっさ行け。テンプレで穴を開けておいた。そこに身投げすれば一名様ご案内とやらだ」  
いよいよか、オラわっくわくしてきたぞ  
行くぞ世界よ、食材の貯蔵は十分か？

「ルパーンダーイブ！」  
又ポン

.....

.....

.....

「これでよかったのか.....？あ、俺の分霊が魔帆良で焼きそば屋  
台売ってるの言い忘れていた...まあ、いいか」

## プロローグ（後書き）

訂正しました

第1話「よろしい、ならば戦争だ」(前書き)

小説読む以外家でやることがない……………  
宿題？知らんなあ……………

## 第1話「よろしい、ならば戦争だ」

やあ、主人公だよ現在名前はフェンリルって名乗っている。なぜフェンリルかというとオオカミの娘だからだ。神GJ、いい仕事した。あとどうやら獣になったり、人に戻ったりできるらしい(犬耳と尻尾は消えんが)

獣モードか……ザ？ビースト！できるな。さて、転生したと言っても介入する気はないから“ダイオラ魔法球がここにはないという事実”を喰ってダイオラ魔法球を出現させる。便利だな……あれ、なんか満腹感が？嗚呼、成る程喰ったから満たされたか。次喰う時は胃の許容量が少ないという事実を喰うか。なんて考えながら私(私に変えた)は安全な場所でダイオラ魔法球を使う為に移動を開始した。

キングクリムゾン！

ヒヤッハー、エベレストの頂上についたぜーつか寒ッ！あ、そいや来る途中にトカゲやらイルカやら犬やら猫やら植物やらを放り込んだがどうなってるかな。設定はこっこの1時間。向こうの一年だしさあ、雪で固定しいざ修行なり！

あるえ、俊敏A++で数十時間しかかからなかった筈んだけど……このモハ臭はなんだ。クシャダオラいっぞ、やべえ喰いてえっわけで

「イタダキマス」

結果、惨敗しましたよ。やっぱり最初はブルフンゴか、とか考えていたら

「フゴッフゴ……」

スファンゴか……よし、今度は武器作ったし今夜は牡丹鍋じゃー！  
「こんどこそいただきます！」

うめえ、ドスファ　ゴうめえ。あと自分のナイフ捌きに吃驚。自分（人間形態）の倍ある巨大をもの数十秒で捌いたよ。家事A++すげえ。これなら嫁さんに行っても大丈夫だね　……………自分でも引いたわ

あ、つかザ？ビーストすれば武器いらなかったかね！？ぬおおおとおおお制作時間を返せええええええええええ。

ガサッ

ああ？なんだ、私は今機嫌が悪いんだよ。ビーストモードでD　フイールドをつつきつてユニバースすつぞフォルア

……………今のはただの電波だ。とりあえず面倒なので首を540。回して音のした方を見ると。そこには一匹の小さな狼がいた

第1話「よろしい、ならば戦争だ」(後書き)

まだまだ原作にからみません後短い

ぐぬおおおお

修正しました

狐じゃなくて狼だったああああ

## 第2話 雷狼出現（前書き）

ジンオウガの子供登場です。ヒヤッハ  
モンハン小説化してきやがった……  
早くネギま分をださなければっ

## 第2話 雷狼出現

ジンオウガ side

まずいまずいまずいまずい…… 本当にこの状況はまずい。自分が相手を痺れさせるのを出せるからといって猪を狩ろうと思いつくところに来てみたけど……見た事のないヤツが硬そうな細長い石（武器）で猪の長を圧倒していた……逃げなきゃ……大人になったら対処できるかもしれないけどまだ子供の僕には無理だ……それにアイツからでている威圧感（苛立ち）……アイツは強い！僕は簡単にやられてしまう！そう考えていた時、アイツの姿が目の前にあった

ジンオウガ side end

フェンリル side

おお……この子はジンオウガちゃんじゃないか……ドスどまりだと思っていたがガードがでるとは……しかし何故この子は怯えてるんだ……？

まあいいか、餌付けすりゃ懐くだろ

そう思い私はジンオウガ（幼体）に肉を持って近づいた。

フェンリル side end

ジンオウガ side

アイツが目の前にいる。アイツが体の一部を向けてくる、もうダメだ。そう思った。だけどきたのは頭を触られる感触だった。

……？？？ これに何の意味があるんだ？でもこうされるとなんだか気持ち良い……

ジンオウガ side end

フェンリル side

あらま、この子目え細めちゃって……かわいいじゃねえかつ！

尻尾もブンブン振ってる……やべえお持ち帰りしたい……ずつとなでなでしているとジンオウガがハッ！（。A。）とした表情を

して後ろに飛びのいた。

グルグル唸っているが肉を背中からチラつかせると尻尾をパタパタさせている……ふっ……食事の後は修行しようと思ったが……予定変更！このジンオウガの人に变化できないという事実を喰ってやる！！

……喰い過ぎで腹痛くなりそうだな

フェンリル side end

side out

フェンリルは肉を地面に置きジンオウガをこっちにくるように誘った。だが警戒しているためチラツと肉を見て尻尾を振るがフェンリルを見てまた唸ってしまう。

フェンリルはしょーがないと呟き、ジンオウガの人になれないという事実を喰らった。

ジンオウガ side

アイツが何か喋って立ち上がり、口を開けて閉じたと思ったら。自分の体が変わっていた。びりびりするのは相変わらずだせるけど、後ろ足が異常に伸びていて、バランスがとりづらい。

アイツは目を細めて笑っていた。

「後ろ足で歩けるよ」

アイツが言った言葉を理解できた。何で？考えているとアイツが僕の体を抱きしめていた。

ジンオウガ side end

フェンリル side

わーかわいいー。しかも男の子なんだー。( 人格が完全に女性化したフェンリル

ぐふふ……シヨタデリシャス……じゅるり。そう思っていたらあの子の肩が揺れた。手足をぶるぶるさせてる……。

「後ろ足で歩けるよ」思わずアドバイスしてしまった。だがジンオウガはキョトンとして動かなかった。私は我慢出来ずジンオウガを抱きしめた。

いただきます。

フェンリル side end

ジンオウガ side

アイツに抱きしめられて数秒経ったと思ったらアイツの鼻息が荒くなり僕は地面に押し倒された。え、ちよ何この状況。さっきから知識として頭に入ってるけど分からない言葉がいつぱい出てくる。現実逃避をしているとアイツの顔が近づき、僕の唇とアイツの唇がくっついた。その後のことは覚えてない。

ジンオウガ side end

## 第2話 雷狼出現（後書き）

今回も短いです。ネギまは一体いつになったらでてくるんだ……

### 第3話 雷狼が仲間になった(前書き)

主人公は変態シヨタコンだったという事実。大人になったらどうす  
んでしょかね。そんなことより胃が焼けつくように痛いです

### 第3話 雷狼が仲間になった

ジンオウガの子供襲った後、フェンリルは悩んでいた。

「（本能にまかせてやっちゃった……。このごどーしよう……。）」

隣を見るとジンオウガ（子供）はすやすやと寝ている

「（ああもう可愛いな）」

そう思いジンオウガ（子供）の首に顔を近づけて、首筋を舐める。

するとくすぐったかったのかジンオウガ（子供）は体を一瞬震わせ、目を開けた。両手を伸ばしあくびをしている。

数秒してこちらに気づいたのか警戒するがその警戒は一瞬で消えた。

「おはよう」

「……………おはよう」

返事にしばらくかかったがそこは気にしない。

「どうして一人でいたの？」

フェンリルが問いかけた。

「……………親とはぐれた。」

「そつ、なら一緒にくる？」

「……………」

「……………うーん」

さて、どーしよう。

……………あ、ちよつちやってみようかな

「そついえば昨日の夜は激しかったな」

「……………？ ツ！？／／／」

「私の方から襲ったのに主導権とられちゃったよ」

「……………／／／／／」

「おかけで壊れちゃいそうだったな？」

「……………／／／／」

ジンオウガ（子供）が涙目になってこちらを睨んでくるが、身長が

足りないため上目遣いになる。

「（可愛いなあもう！）責任とってくれないかな？」

「……………く」

「ん？」

「行く！…！ついて行く！…！」

「よし、じゃあ行こう。まずは服を着て準備しよう　ところで君の名前は？」

「名前、ない」

「……………そっかじゃあつけてあげる。今日から君の名前は……………今日からお前は富士山だ！！」

「（……………なんか変な電波が。うーんでも名前どうしよう。

ジンじゃ普通過ぎるしライでもなあ……………。よし、決めた。）君の名前はスレイル。神話でフェンリルを拘束したスレイプニルの内、数文字をつかわせてもらったよ。」

「スレイル……………」

「そ、スレイル。君の名前。さ、準備しよっか」

「……………うん！」

キングクリムゾン！！！！

「よし、準備出来たし、外にでて魔法世界に行くぞー！」

「まほうせかい？」

「そ、魔法世界。今は確か戦争中だけど魔法を覚えといた方がいいからね。」

「ふーん……………」

さあ、いざいかん「魔法世界（ムンドウス？マジクス）」へ！」

「お……………」

### 第3話 雷狼が仲間になった（後書き）

あああ、相変わらず短い。

次でなぎつちよがでできます。フェンリルはゼクトやタカミチをみてどうなるんでしょうか（笑）

修正しました。グレイプニルってなんじゃあああああああ！！  
またまた修正、スレレルっておい……

## 第4話 紅き翼との接触（前書き）

テストエ……………20点とつちまった……………  
今回も妄想と集中力が続くまで書き続けます。



るシヨタ二人。

うわあ……混沌だ……だが！私はカオスマンバーにつっこむという苦行をやったのけよう！私がそこにいる理由！そこにシヨタがいるからだ！

気配を完全に消し目標をセンターに合わせてシュバツ！！今の私は獲物を狩るハンター（変態）！今の私に不可能はない！！

まずは一人目じゃああああ！！

「……………さんもうちょっと静かにした方が……………みぎゅツ!?」  
「敵襲か!?」

side out

スレイルside

フェール足速い……………全力をだせば追いつけるけど……………

見失っちゃったけど匂いで捜せばいいや……………ん、こっちだ……………

ようやくフェールを見つけたと思ったら僕じゃない別の子に頬擦りしていた。

むう……………

side out

「むう……………」

その言葉で全員我に返った。いや、一人を除いて全員我に返った。

その一人は言わずもがなフェールである。

「おい、てめータカミチになにしてやがる!!」

「そうだぜ嬢ちゃん、離れた方がいいぜ。それと坊主、俺と代われ」

「やっているのは抱きつき攻撃、それと筋肉ダルマには抱きつきたくない」

そりゃ残念、とラカンが言っているがそこまで残念そうではない。

「あああ、あのツ！は、離してください!!」

「焦るところも可愛い……………ん?」

「……………」

「……………」

ガシィッ!



#### 第4話 紅き翼との接触（後書き）

やっとナギ達出せた……更新遅くなったのは夜中書いてたら寝てしまいきていた時にはdsの充電が切れていてやる気がでなかったからです。ちよ、石とかミヨルニルを投げないで……

## 主人公とスレイルの設定（前書き）

タイトルのまんま主人公sの設定です

最近友人からpsp借りました

友人との間柄は

私「青いお空がほしいのよ」

友人「飛ばしてごらん」

私と友人「シャボン玉」

こんな感じです

## 主人公とスレイルの設定

とりあえず fate 風に

名：フェンリル

筋力：C +

耐久：C

対魔力：B

魔力：A -

俊敏：A + +

幸運：B +

保有スキル

気配 & amp; 殺気遮断 A + +

文字通り気配と殺気を完全に消すスキル。俊敏と掛け合わせれば直感 A 以上あるもの以外太刀打ちできない。

家事 A + +

家でやることはなんでもござれ、料理、掃除に洗濯に接客接待、ほんとになんでもござれ

捕食 A + +

相手を喰らい己の糧とするスキル。

概念も喰べることが出来るのだから正にチート。世界は私で回っている。

もし fate の世界に行くとしたら……

クラス 食人鬼<sup>イーター</sup>

筋力 C

耐久 C

魔力 B +

対魔力 B -

俊敏 A ++

幸運 B

クラススキル

捕食 A ++

ゲイ？ボルクなどの概念は真名解放がされていない状態ならば食べることができる。

無論「くがここにはない」という事実も喰べることが出来無い。

吸収 B +

喰らったものを己が魔力に変換し、魔力を回復させる。マスターがいなくとも人や木等を週に三、四回喰べれば現界しつづけることができる。

保有スキル

家事 A ++

家事だつたらなんでもできる。目指せメイド長。

召喚 C +

己の伴侶たる雷狼を召喚。ただし召喚した後戦闘が終わればイチヤつく。

宝具

「食い散らかす食欲の罪」グラトニ A ++

対人宝具

見た目は巨大な鎚だが、殴る所に狼を真正面から見た顔の絵柄がついており、殴った相手のステータスのどれか一つをワンランク減らし、自分に吸収する。だが筋力Cのため当たる確率は低い。

「神喰らう悪食の狼王」フエンリル A ++

対人宝具

相手の足元から巨大な狼の頭を召喚し、対象を喰べる宝具。

対象の神性が高い程威力が上がる。

直感B以上、もしくは幸運A以上ないと避けることは難しい。

「闇よりの侵食」オホノイワヒ C

対人宝具

自分の体を隠し、気配察知に長けたものでさえ認識できなくさせる。

次はスレイル

名前 スレイル

筋力 D

魔力 E

耐久 D

対魔力 C

俊敏 B

幸運 B

武具は無く雷を纏い素手で戦う……予定。

多分対戦時は雷を放出して自分の身を守るぐらいしかできないかと

……

名 スレイル（成長（予定））

筋力 A

耐久 B

対魔力 C+

俊敏 A

幸運 B

こんな感じにする予定です。

因みにフェールの身長は163cm、幼スレイルは135cm。大

人スレイルは195cm。

## 主人公とスレイルの設定（後書き）

……本文よりこっちの方が読むのに時間かかるような気がする……

## 第5話 戦の準備？（前書き）

秀才なんていららない、画力なんていららないからやる気を……

書き方ちょっと変わってしまいました

## 第5話 戦の準備？

紅き翼とエンカウトし同志を得たフェンリル、主人公の変態度はインフルエンザから複雑骨折並みの重傷に……………！！！！

「私の変態度ってそこまで酷いの!？」

「何もないところで誰に叫んでるんですか同志フェンリル」

「あ、ああ、なんでもないわ（作者、後でシバく）」

おおこわいこわい

「（もついいわ無視する）ところで、どこへ向かっているのかしら」

「次の戦場じゃ、用意も出来たしの」

描写していませんがフェールとスレイルは同行することになっています。未熟者故書くことができませんでした。

「ふーん、暴れるのかしら」

「ざつと言つとそうだな」

やつとこさ赤髪鳥頭が発言。影が薄いです

「なんか誰かに馬鹿にされた気がする……………」

「わしは違つぞ」

「私も違つ」

「私もです」

「俺も違つな」

「俺もだ」

「ナギは馬のように速くて鹿のような強さがあるでしょう?」

「おう、ありがとよ……………って馬鹿にしてんじゃねーか!！」

「あら、鳥頭なのによく気づいたわね」

「ウギー……!！」

「猿みたいじゃのう」

「猿だな」

「猿ですね」

「俺はリーダーなのに…………orz」

見事なorzです。無駄に土下座の真理を見抜き無駄に土下座の根源に至らぬとできないこのorzをナギがやるだど……………!?

「扱、そろそろ行くかの」

「やっとなれられるぜ」

ラカンさんその物騒な元気をどうにかしてください

フェールside

作者、書き方変えたわね。四苦八苦するでしょうけど。私には関係ないし

>それは酷いと思うのです<

今のは幻聴よ、私はなにも聞いていないわ。

さて、話を切り替えましょう。

今私達はグレートブリッジ……………だったかしら、その制圧。何人食べれるかしら、まだこの世界に来て人と食べていないし。魔力はどんな味がするのかしら……………

楽しみ

## 第5話 戦の準備？（後書き）

今回も短いのです。

神は言っている、ここで終わる運命ではないと……………

こんな更新ペース & a m p ・文字量で大丈夫か？  
大丈夫じゃない問題だ

初めての喰人（食事）（前書き）

実を言うと原作一回も読んでことがないのですが……クソッ、キヤ  
ラがわからない！

## 初めての喰人（食事）

フェールside

さあやってきましたグレートブリッジ。つってももう戦闘は始まっているけど。

はーほんと紅き翼は化け物揃いね、ナギは雷の斧で敵をなぎ払うわ  
ラカンにはラカンで千の顔を持つ英雄で戦艦落とすし……おいまて詠  
春、刀から雷飛ばすな。

この公式チート集団め……

さて、私も暴れ（食いちらかし）ますか

side out

表現するのが難しい殺気、若しくは闘気そのようなものが帝国兵士  
にぶつかった。

ただ兵士達が分かること、それは絶対的な捕食者がいるということ。  
誰かが音を出した。結果、その音を出したものは膝から下を残し消  
えた。否、喰われた。

二本の足から血の噴水があがる。しかしそこまで血の量は多くない  
のですぐに止んだ。硬直した時間が消えた。兵士達は犯人を探した  
が、それは徒労と化した。二本だけ残った足をひよいと掴み目の前  
の少女が喰べたのだ。嫌な音が響き渡る。一人、兵士が悲鳴を上げ  
逃げ出した。少女はそれを確認すると大地を七回蹴り、逃げた男を  
通せんぼし、血を顔中につけ笑顔でこう言った

「大魔王からは逃げられない!!!」

場の空気が凍った

フェールside

うん、わかってたんだこれを言ったら滑るってでも言いたかったん  
だよ!!!

言いたいでしょ!?!みんな言いたくなるよね!?

………いいもん、いつか火よ灯れをして「いまのは燃える天空では

ない、火よ灯れじゃ」的な事言つてやる！！  
あゝもうヤケクソだ！！全部喰べてやる！！

side out

場が空気が凍り多少涙目になりながらうーうー唸って此方を睨みつけるのは可愛らしいのだが先程の喰人（食事）でそれも恐怖に変わり、兵士達は身を引き締める。その数秒後、八つ当たりのように少女が動き兵士達の肉をもぎ取ろうとする。当然飛びかかってくる速さが普通ではない為兵士達には避けることは出来なかった。一人、二人と仲間が葬られていく。先程まで居た者達はもう居ない。全て少女の胃袋の中に消えた。あの小柄な少女の体にどうやって入るのだろうか。命の奪い合いのさなか、一人の兵士は戦場に似合わない事を頭に浮かべる。その後一人の名も知らぬ兵士は意識を闇に呑みこまれた。

初めての喰人（食事）（後書き）

やっと食人鬼っぽいことだせた……いやっふい

ああ、もう眠い……短い……

どうでもいいですけど胸揉んでも胸の細胞が死滅するだけで大きくはならないそうです

第7話 酢豚にパイナップルは邪道 (前書き)

外氣を取り込みそれをコントロール出来れば仙人になれるのかなあ

## 第7話 酢豚にパイナップルは邪道

フェールside

グレートブリッジ奪還戦が終わって私達は紅き翼と別れた。決して（やべえ……流れ分かんねえ……）的な事でそうなったわけじゃないわよ！？……コホン

前回はシリアスっぽいなかだったのにもう「シリアス？なにそれおいしいの」状態じゃない……

（メタ発言は止めて欲しいと作者は思っちゃったりしちやつたり）  
なにも聞こえないわー（棒

さて、紅き翼（混沌組）から別れたのだし力の修行でもしましょう。場所は何処にしようかしら……

ついたー。やってきました南の島あー。

スレイルが暑さでぐでーってなってる。ええいか弱いやつめ！！まあ暑さ以外にも原因があるのだけれど。にしても暑い。修でもいるのか……？伏線みたいになんかちょっとだけスレイルに名前付ける時ナナ？テスカトリと暑さ勝負してたし。

もつと熱くなれよ！もうちょっと頑張ってみるよ！シヨウグ ギザ  
ミモトウルルルルルって頑張ってるじゃないか！！

あれトウルルルルルってなるのかしら……  
side out

色々と危険な電波を受けつつも修行の準備をするフェンリル。スレイルは水辺の木陰でお昼寝中です。そして準備（というかダイオラマ魔法球の設定）を終えたフェンリルが夢の中の住人になっているスレイルを起こす。当人は完全に目が覚めていないようだ。目をこすりながら不安定な歩き方をしている。因みにフェンリルは自分の「老い」という概念を食べた為不老になっている。

スレイルの「老い」はまだ食べていない。20才位まで成長させる  
そうだ。

修行風景等は作者の実力不足で省かせてもらいます。

約200年をダイオラマ魔法球で過ごした。スレイルは青年になり、自身の能力の雷を使う体術を編み出した。千の雷クラスの電撃を一回のパンチで放つのはチートだと思う。

一方フェンリルは喰らう能力でどういうものまで食べることができ  
るのかを調べた。

“ダイオラマ魔法球がない”という事実をも喰えるありとあらゆるものを食べる能力。もしや神をも喰えるのではないか?と思いつく自分を転生させてくれた神っぽいなにかに気合いで通信し、喰ってもいい神がいなかと相談したところ笑われてしまった。

やっぱり駄目かと思つたが、意外と腐つた神がいるらしくそいつらをマンボウに転生させる前にお前のところによこすからそれを喰えと神っぽいなにかが言つたのでそんな神界で大丈夫か?と言つてみたら一番いい神を頼む。とノリノリで返してくれた。

案外お茶目である。名前を聞いていなかったのでもそいや名前何よ、と言つたら急に黙つてしまい通信なのに遠くから神っぽいなにかの悲鳴と若い女性の怪しげな笑い声が聞こえたので即急に通信を切つた。本当に妻いたんだなと思つたフェンリルだった。

数分して一人の男が魔法球の中に転送されてきた。相手の放つ神性(微弱)で一発で神だと分かつた。スレイルを安全な場所に非難させて、神(マンボウに転生する予定)と向かいあつた。逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ……とか言つて  
いる。なんでその名台詞知つてるのさ。転生したら知らない水中だ……とか言いそうである。何時まで経つても動かないので遠隔捕食で腕を喰つてみると悲鳴を上げた。フェンリルの顔を見てみるとどうやら味はあまり美味しくないようだ。顔をしかめている。

sideフェンリル

神は美味しくて神力を吸取出れるのかな?と思つていた時代が私にもありました。神力の吸収は出来るけどなんなのこの味、例えるなら小松菜を塩茹でした後ホイップクリームをかけたような味。胸焼

けしそうな甘さのあとにつがい味が口いっぱいに広がる……うええ。美味しくないようでも神力確保の為頑張るか。っておりよ、  
「なんで腕が再生しないんだ、3rdインパクト後のリリン化したシンジの能力を手に入れたのに……!?」とか言ってる。はは〜ん、こいつ転生者か。だからあのセリフ知ってるし神性（作者は赤い海になった後シンジ君は神に最も近い動物になったと思っっています）持つてるのか。まあいいやさっさと喰っちゃおう。いただきm「こい！！エヴァ初号機！！」おおう某汎用人型決戦兵器ではないですか。うわー勝ち誇った顔でドヤ顔して見下してる。その足喰ってやるうか。

マンボウ  
神side

俺はトラックに轢き殺され死んだ。でも運命ではまだ死ぬ時期じゃなかったらしく気の弱そうな女神が謝ってきた。

ふざけんじゃねえよ！！と言いたかったがチート能力をくれて転生させてくれるらしいから許してやった。

そうして俺は転生したがやりすぎたらしい。洗脳してた518人のハーレムを作っただけじゃねえか！！罰で殺され記憶以外能力を封印され、人間以外の動物に転生させられるらしい。

でも目の前の女に勝ったらお咎めなしだ

「こい！！エヴァ初号機！！」

第7話 酢豚にパイナップルは邪道 (後書き)

頑張ったよ……私頑張ったよ……長文書けたよ……

第8話 画面テープは剥ぎにくい(前書き)

しゅづぞーはきつと」第三魔法(キシユア?ゼルレッチ)の使い手

## 第8話 両面テープは剥ぎにくい

某紫の巨人の肩の上で神は勝利を確信していた

(くくくくく、俺は最強オリ主なんだ俺は負けないんだよあはははははは！！)

なんと醜いものである。しかしこれは人間ならば当前の歪みである。何の力も無い人間が急に強大な力を持つことができれば殆どの人間はこうなるだろう。

力に溺れ、本来止め具となる理性も腐り本能的な行動にでるだろう人間というものは時には美しいものを生み出し、時には醜いものを生み出すのだろう。

そうこう考えている内に

「行け！エヴァンゲリオン！！！！」

紫の巨人の攻撃が始まった

フェールside

あれなんで落ちないのかしら……

あれか、コバンザメの様に引っ付いてるのか。

つて、おおういきなりの攻撃ですか。そこ、下品な笑い声上げるなキメエ。あと本当になんで落ちないんだよ！？

あーもう面倒臭いわね、全部喰べてやる。

………初号機はもらえないかしらね？

side out

マンボウ

神side

あつはつはつは！！やっぱり俺は最強なんだ！！！！！！誰も止められねえよ！！！！

俺の夢は世界中の女(BBA、不細工を除く)でハーレムを作る！  
！邪魔なんかされてたまるか！！まだニコポやナデポで500人ぐらいしか落とせてねえのに！！

最強オリ主である俺の邪魔すんなよ女ああああ！！！！！！！！！！





る！！！！

## 第8話 両面テープは剥ぎにくい（後書き）

あれ……初号機も喰べさせるつもりだったけど……よし、性的な意味で喰べさせよう（笑）

というか初号機がデイルムッドさん並みの忠誠騎士に……

第9話 モゲロ（前書き）

スレイル君が某赤い弓兵っぽくなってしまった件

## 第9話 モゲロ

スレイルside

ふむ、これはなかなかイイ。慌てふためく我が妻に紫色のチャイナ服を着た少女が迫っている。絵的にまだ見ていたいが空気にされるのは嫌だからな。話の輪に入らせてもらおう。

「フェール」

何時も通りの声で愛している妻に声をかける

「どうしたの？」

フェールから何時も通りの返事がくる。

「家族が増えるのだ。俺も話に加わったほうがいいだろう？」

俺達は夫婦だろう？、というフェールが顔を赤くした。

クク、何度も行為をしているのにその辺はまだ初心の様だ。そういうところが本当に愛らしい。

「主、この人は……？」

ああ、自己紹介をしていなかった

「俺は「名前はスレイル、私の夫。戦闘能力は高いわ。」「……むっ」「フェールを見るとしてやったりという顔だ。やれやれ、お返しされてしまったか

「初めまして、エヴァ初号機です。」

「あゝその名前なだけで変えない？」

「ふむ、俺も同感だ。華麗である君に無骨な名前は似合わなそうだ

……ッ」

何故かフェールが睨みつけてくる。何故だ。

む、そっぽを向いてしまった。

「フェール」

「っーんだ」

「フェール？」

「っーん」

「……………」

これは一筋縄ではいかんらしい。

やれやれ、無視される悲しみを知ってもらいたいものだ。

「フェール」

「つー……………んむう!？」

フェールの唇を塞ぎ、舌を入れて口の中をかき回す

数十秒たち、頃にフェールの目はトロンとしている。

「スレイルウ……………」

フェールから求める声があるが背に回していた手を戻し、フェールから離れる。

「……………え？」

フェールは裏切られたような顔をした。

俺もこのまま続きをしたいがあの子が赤面でぶっ倒れているからな。それに無視された分の仕返しだな。だが……………

「さて、この子を部屋のベッドに寝かせてこよう。名前や続きはその後だ。」

どうやら俺は甘いらしい

「……………うん!」

side out

そのあとエヴァ初号機がいたしているとこに現れ、またぶっ倒れたとか何とか

第9話 モゲロ（後書き）

スレイルモゲロ

フェールがスレイルの前では子供化している件  
あとなんでこうなった

## 第10話 豆腐の角で頭を打って死ね（前書き）

友人亀「高度10,000mから豆腐を頭に落とすか、秒速340kmの速さで豆腐を頭にぶつけると殺せるらしい」

私「なんとという。だが高度10,000mから頭狙うとかどこのゴルゴ。あと秒速340kmだと醤油ではなく時をかける豆腐になるぞ」

友人亀「そんな映画あったな前」

それでは第10話です。

## 第10話 豆腐の角で頭を打って死ね

フェールside

「麻帆良に行くわよ！」

「は？」

ふっふーん、驚いてるわね。あ、そうそうエヴァ初号機だけど名前決定したわ。

エヴァ・T・アドバルト

TはトライデントのTらしい。鋼鉄のガールフレンドだと……！？因みに私たちの名字もアドバルトに決定した。

よくよく考えればこの約200年間名字がなかった。

まあ……それに気づかないぐらいの200年だからナニをしていたかは察してほしい。

「行くのは構わんが 別に、両面宿儺を倒してもかまわんのだから？」

スレイル、最近アーチャー化が進んでいるわよ。

「何故今行くのかね？原作開始の時でもいいだろう？」

ハイ、ここでお気づきの方はいらっしやいますでしょーが！実はスレイルとライ（エヴァだと闇の福音とかぶるためでも親しくないとその名前言ったらATフィールドでつくった疑似ロンギヌスの槍でアッーされる）は原作を知っているのですよ前田さん！（前田さん誰やねん

気合でこっちより時間が進んでる転生前の俺がない平行世界に行くゲートを作ってきたのだよ私は！！つまりpcとか漫画とかいろいろ別荘に詰まっているのだ！生きる世界変わってもやっぱりこうは思う。二次元万歳！

閑話休題

「別に造物主戦が面倒トカジャアリマセンヨ？」

「ならばそのかわいらしい顔をこちらに向けるフェール」



……今度奥さんの部下（抑止の守護者）に旦那さんの分霊体が地球でいろいろやらかしてると言つとこう

あ、そうそう。神っぽい何かの奥さんはガイアらしい。

英霊エミヤに会ってみたいと言つてみたら「いいわよ」と軽ッ!?

それに元々神っぽい何かは能力を持った人間で奥さんが神（仮）めんどいので略）に恋をして付き合い始め結婚のところで婚姻届と世界と契約する書類にすり替えられたらしい。奥さんエ……

奥さん曰く「永遠を生きる私と結婚するならこれぐらいいいでしょっ?」

このセリフを聞いて男前だと思つた私は悪くない

で守護者になりいろいろやってるとユグドラシルの管理人になつていたらしい。どんだけだよ

奥さんもこれは予想外だつたらしく「私この地位まで来るのに47億年かかったのに……orz」と言つていた。

神（仮）はナギ達並みのチートらしい

それが分霊体とはいえ麻帆良にいるのだ、いろいろとやばいらしい。危険度は制約付でも造物主2人分。どんだけチートなのよ!

神（仮）の名前については聞き忘れた

閑話休題。

「あと前に電話した時に『焼きそばおごつてやるから麻帆良来い。飛ばした時間軸わからんかったから1000年ぐらい待つてるんだが。』だつて」

私には1000年待つなんてできない。無限の時を生きているあいつ等は例外だと思っけど

「ふむ、待ち人を待たせるのはたしかにいいことはいえんな。だが、それならば先も言ったように原作開始あたりでいいのでは？」  
うー……

「わかった……麻帆良に行くのはネギが来る数年前にする……」

「よし、ならば戦争に参加しよう。ここで200年でも魔法球の外では約200時間。十日程しかたっていない。まだ連合と帝国の戦争は続いているだろう。最近戦っていない。体がうずうずする」  
こ、この戦闘狂は……  
バトルジャンキー

「そうですね、ここで戦争に介入すれば御主君の名も世に広がりますね……」

ライおまえもか!?

「いくぞフェール、胃の調子は十分か？」

じゅづぶんじゃない!

## 第10話 豆腐の角で頭を打って死ね（後書き）

「疑似ロンギヌスの槍」

魔法や気を無効化。ハマノツルギの槍版と考えればおk

しかも着弾時、ATフィールドで圧縮していた魔力を一気に開放す

るので第五次聖杯戦争のアーチャーのように「壊れた幻想」のよう

なことがおきるのでエヴァの筋力と合わせると「ロンギヌス・エクスプロージョン投槍爆雷」ができる

しかも追尾性があるので高確率で当たるといっておまけつき

## ライの設定（前書き）

テストです。期末テストです。これで行ける高校決まりますぎゃあ  
あああああ

みんな！オラに集中力を分けてくれ！！

## ライの設定

名前：エヴァ？トライデント？アドベルト

筋力：E

魔力：B

耐久：C

俊敏：D

幸運：C

～紫巨人化～

筋力：EX

魔力：B

耐久：A - ～EX

俊敏：EX -

幸運：C

～保有技能～

肉体変化

ATフィールドで自身のカタチを変える

しかし時々誤作動して元の姿に戻ってしまう

153cmがいきなり約60mになるので注意

ATフィールド

自身の心の壁を形にしたもの

形をイメージで変える事が可能

主に刀や弓、槍を形作る。銃は複雑で無理。つかATフィールドを  
撃ち出す方が速い

耐魔力：B

大魔法以外の魔術や魔法をレジストする。  
千の雷クラスでやっと火傷というチート。

S2 機関：B+

半永久的にエネルギーを出し続ける。

だが1秒間に一定の量しか出せないため一定量を超えるエネルギーは出すことができない。(といっても偽ロングリヌスを八本位同時に作らなければそんなことはおこらない。)

元の姿に戻ったら大半EXとかチート過ぎる。俊敏は普通に走っても数百m一瞬で行くし……

こいつ一人だけで世界征服出来るだろもう……

イスカンドル「ガタッ」

およびじゃねーよ

## ライの設定（後書き）

テストだから金曜日まで更新出来ません  
でも逃避したくて投稿するかもしれません。

うぐああああああネタも思いつかないよおおおおおおお

第11話 俺達の本編はこれからだ!! (前書き)

「遂に魔王の部屋に着いたぞ……………」

「なんて威圧感だ……………扉ごしても感じられるぞ……………」

「へっ、びびってんじゃねーよ。俺達ならいけるぞ」

「ああ、そうだな」

「よし、みんないこう!!」

「……………おお!!」

ガチャ……………」

「来たか人間よ……………」

「魔王!!俺は……………いや俺達はお前を倒して世界を平和にする!!」

「平和……………か、平和というのは望めば望む程争いがおきるのだ……………」

……………それと私は魔王ではなく中ボスだ」

「……………なに!?!」

「魔王様は魔王城地下の儀式の間……………」

「ちくしょう!!なにかしやがる気だな!」

「の隣に最近建てたアニメイトでバイトをしている」

魔王「いらつしゃいませ〜!」

それでは第11話です

## 第11話 俺達の本編はこれからだ！

魔法球から外へ出て来てフェール達がつた行動は紅き翼との合流だった。

「む……こつちだな」

スレイルの無駄に無駄を重ねた無駄に高性能な強者リーダーで案外早く見つかりそうである。

時々リーダーに別の強者がかかり、戦いに行こうとするスレイルを必死に止めたが結局リーダーにかかった人と戦うことになった。だがリーダーにかかった者が変な口調の鉢巻きつけたワカメだったり、ピンクポニテのニート侍だったり、熱くなってるテニスプレイヤーだったり、顔面のデカいオカマだったりと散々であった。

「本当に今度は紅き翼アラレクラなのよね」

「ああ、間違いない。俺が幼いころに感じた気と魔力の波長だ」

あんなちっさい時に感じたものをよく覚えているものだ。私にやインパクトないと覚えてられん

インパクトあつても200年も前のこと覚えていられん

「御主君、顔色が悪いようですが……大丈夫ですか？」

と主を心配そうに見つめるライ

「え、ああ、大丈夫よ、問題無い」

一番いい装備がでそうな会話をスレイルがバトルジャンキー戦闘狂リーダーで探知している間、暇潰しにとだべっていた

「あと472mだ」

無駄に高性能である

紅き翼side

「何じゃ！これが噂の紅き翼の秘密基地か！

どんなところかと思えば……掘立小屋ではないか！」

「俺等逃亡者に何期待してんだ？このジャリはよ」

「なんだ貴様無礼であろう！」

「へっへ〜ん！生憎、ヘラス皇族にや貸しはあっても借りはないんでね！」

「むう〜」

「あの子供が第三皇女なんですか…」

タカミチ、皇族のイメージが壊れていつてるからといってそれはないだろう

「さーて姫さん。こつからが大変だぜ。連合にも、帝国にも……あなたも味方はいねえ」

ナギが話始める

「やはりそうか……我が騎士よ」

「その“騎士”って何だよ、姫さん!？」

クラスで言ったら俺は魔法使いだぜ？」

「もう連合の兵ではないのじゃろ？ならば主は最早私のものじゃ」  
「な……」

「（……これ遠まわしに告白よね？同志アル）」

「（……まあ、そうなりますね同志フェンリル）」

「（何故誰も突っ込まないのだ（のでしょうか）……）」

三名増えているがアルビレオとゼクト、ガトウしか気づかず話は進んでいく。（気づいたのに突っ込みを入れないのはツッコむタイミングを逃したからである。このようなことではお笑い界では生きていけないぞ

「連合に帝国……そして、我がオステイア。世界全てが我らの敵という訳じゃな。じゃが……主と主の“紅き翼”は無敵なのじゃろ？」

世界全てが敵……良いではないか。

こちらの兵はたったの7人……だが最強の7人じゃ。

ならば我等が世界を救おう。

我が騎士ナギよ、我が盾となり剣となれ」

「（いつこつちに気づくのかしら……）」

「（さあ……ですがゼクトやガトウとクルト君は気づいているよう

です)」

「へっ、だから俺は魔法使いだっつーのに……。やれやれ相変わらずおっかねえ姫さんだぜ」

呆れた様にナギは喋っているがそれでもアリカの前に跪く。そして、アリカもナギの肩に剣を置くようにして掲げ、騎士契約の様な形をとる。

「いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう」  
「なぎは高らかと宣言した」

「して……。そこでアルビレオと話しているものとその隣にいる二人は何者じゃ？完全なる世界の手先か？」

「「「「（やつと全員気付いた……）」「「「「」

第11話 俺達の本編はこれからだ!! (後書き)

テスト終わったぜeeeeeehaaaaa!

やっとここまで書けたよう。

長い……小説というものを筈の成長速度同様に甘く見ていた……  
前書きはただのおふざけです

第12話 熱々のお米にキンキンに冷えた牛乳を混ぜたものを食べる(前書き)

サブタイトルのやつやったら多分吐くよ

## 第12話 熱々のお米にキンキンに冷えた牛乳を混ぜたものを食べる

フェールside

「不気味なくらい静かだな……」

「舐めてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

色々キンクリで飛んだけど、今私達は墓守り人の宮殿にいるわ  
てゆーかアヌビスの宮殿ってなによ

墓守りが宮殿持ちって……

「ナギ殿！混成部隊配置完了しました！」

おお、大分考えてた

でもやっぱり……連合の軍がないわね。大半は帝国とアリアドネ  
ーだし……

「連合の説得は間に合いませんでした……」

「おう。あんたらが外の召喚魔や自動人形をおさえてくれればその  
間に俺達が突入出来る。頼んだぜ」

「は、はい……そっそれで……ナギ殿、サツ、サインを頂け  
ないでしょうか」

ほほう、あのこはナギつちよのファンクラブメンバーと見た

「ああ。それくらいなら構わないぜ」

さらさら〜と書くナギ。おいまて、なんでそんなに手慣れてるんだ

「ナギ、もう時間がない。早くしないと世界を無に返す魔法が発動  
してしまう」

「じゃ、俺達は突入するがフェンリル達も一緒に来るのか？」

「いいえ、外で悪魔狩りをするわ。それにあなたは最強の魔法使い  
だから勝つのでしょうか？<sup>マシイター</sup>食人鬼である私が行ってもかなわないわよ」

「!?!?……そうだな！よっしゃあ！さつさと完全なる世界の奴  
等を倒して帰ってくるぜ!!」

「はいはい、いってらっしゃい」

気合いを入れ直したナギは振り返って後ろで静かに待っている紅き

翼に号令をかけた

「紅き翼……………出撃!!」

「……………応!!」

side out

紅き翼が墓守り人の宮殿へと突入した数十分後に

「よし、やるわよ」

何を?とは聞くことはできないだろう。

何せいま言葉を発した女性には殺気を悪魔に向けながらしたなめずりをしているのだ

しかしそれは下品ではなく、それが妖艶さを醸しだしている。男性兵士は前かがみものである

「うん、せっかく道具を作ったのだしここで使わなきゃどこで使えっというのよ」

そうしてどこからか(?????)取り出した鎚。つまりハンマーなのだがその大きさが異常である。鎚の持つ場所以外の分が縦1mもあるのだ。そして殴るところには狼の絵。

それを女性はふりかぶり、悪魔の群に飛び込んだ

「……………!」

普通の人間には自殺行為と見えるだろう

だが色々と普通ではない雷狼と紫の巨人は

「ふむ、どうやら先をこされたようだぞライ」

「私もご主君をと暴りたいです。ああ、命令があれば元の姿に戻れるのに……………」

「君は元の姿である紫の鬼神に戻らなくてもフィールドをつかえば一発だろう?それにフェールを踏み潰してしまうかもしれんぞ?」

「む……………流石にご主君を踏みつけるのは気が引けますね」

“早く暴りたい”と呑気?に会話していた

「お、お二人はフェンリル殿が心配ではないのですか!」

「ああ」

「ええ」

「フェールなら大丈夫だろう（ご主君なら）」  
その瞬間フェンリルが飛び込んだ場所を中心に悪魔達が爆ぜた。

第12話 熱々のお米にキンキンに冷えた牛乳を混ぜたものを食べる（後書き）

うぐお……集中力が……切れた

今日はもうかけない……

また短くなってすみません……

第13話 コンビニの肉まんにとろけるチーズのせたら異様に美味しい(前書き)

「くそっ……………なんて強さ……………流石魔王」

「人間に負ける程年老いていないよ。あと私は中ボスだってば。魔王様んところはよ行ってやれ。多分バイトのシフト終わって今頃ファミレスでお子様ランチ食べてる筈だから」

「勇者はまだかなあ……………」もぐもぐ

ヒャッハーア!!!13話だア!



「お師匠！お師匠おおおおおお！..」

第13話 コンビニの肉まんにとろけるチーズのせたら異様に美味しい（後書き）

ぐふっ……私のライフポイント（集中力）はもうゼロヨ。ネタが思いつかないネ

ちやおちゃおーみたいになってるけどもうダメだア……おしまいだア……

一人用のポッドでかア？

うん、なに言ってるんだろ

高校、大丈夫かなあ……

あ、pvが2万を超えました。ありがとうございます。

この小説、改めて見るともう1ヶ月も続いている、飽き症の私がよくここまで書けたなあ、と思う今日この頃です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9595x/>

---

食人鬼の魔法生活

2011年12月11日19時48分発行